

# 街場の就活論 vol.8

～新卒採用とキャリア教育に関するハナシ～

だん あそぶ  
団 遊

## 幼稚園も小学校も大学も「生きる力」のテーマは同じ

先日、とあるワークショップと一緒に参加した愛知県の小学校の若手養護教員（女性）が、「生きる力」を育むために、仲間づくりの取り組みを校内で推進している、という話をしていた。

本誌に連載もしている友人の幼稚園園長・鶴谷主一さんは、自園で開催する「お話し会」という行事について、発表会までの担任を含めたクラス全員での試行錯誤や、その過程自体に意味があり、それらが「生きる力」になると信じていると言っていた。

私が大学で取り組むキャリア教育という分野も、いわば「生きる力」の養成だと思う。狭義の意味で「就職活動支援講座」をキャリア教育と呼ぶ人もいるが、もちろんあんなものに大した意味はない。二本足で立てない若者を量産するかのような現行の教育プログラム破綻の先送りでしかない。

その先送り先である企業は、もはや日本人の若者に興味はなく、二本足で立とうとする外国人に興味を向けている、というのが偽らざる実態だと思う。



大学で行う「生きる力」の養成は、大きく分けてふたつにわけられる。一つ目が入学初期に受講する「初年次教育」と名のついたそれであり、二つ目が主に3年次後期から受講する「就職支援や仕事観育成支援」である。そして、興味深いことに、前者は養護教員が小学校で取り組むそのの相似であり、後者は園長が幼稚園で行う取り組みの相似である。

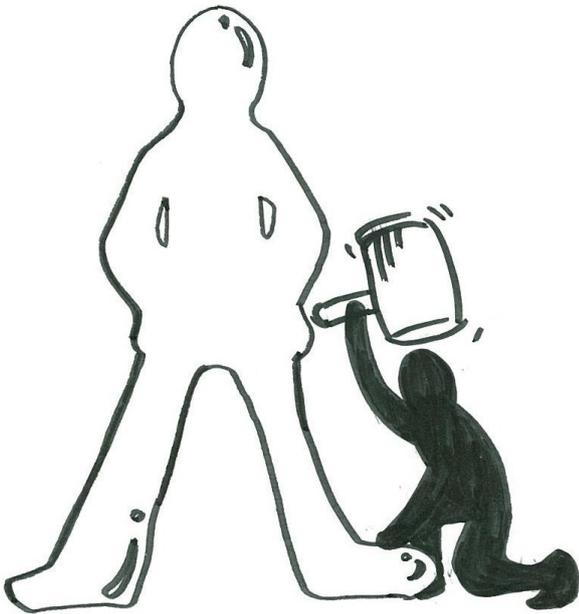
つまり「初年次教育」とは、ようは「友達づく

り」である。全入時代を迎えときが経った大学には、入学しても登校しない大学生が数多くいる。それを通学させるのが初年次教育の狙いであり、効果的な施策は友達を作ってあげることである。大学も、いろんな意味で辞められては困るのだ。

「初年次教育」などという何か特別なプログラムが走っていきそうな雰囲気醸し出しているが、大半の大学は「来させること」に必死である。

一方の「就職支援や仕事観育成支援」とは、「就職できなくてもグラつかない人間としての土台づくり」であると私は思うのだが、多くは「就職活動」の過程でその力を育成しようとしている。

もっとも実際は、就職をゴールと置いた偏差値教育の延長線的な講義も多く、学生にはそちらの方が驚くほど人気がある。



ただ、いくら支援をしても、卒業後進路が決まらない学生は、一定数輩出されるものである。そしてそこから「どうするか」もまた人生の醍醐味

だと思うのだが、実際は悲嘆にくれ動けなくなってしまう「元大学生」も少なくないため、その後のフォローアップも欠かせない。そんな状況を、多くの大学関係者は、口に出せない思いとして「こんなことを大学でやらんといかんのか」と嘆いている。

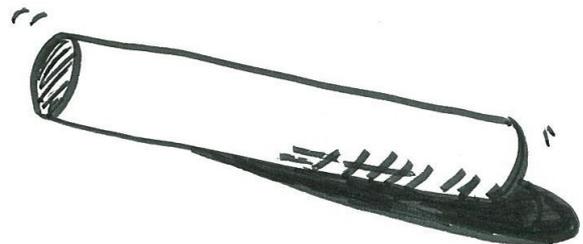
これだけを見て「大学までの教育課程で行われるべき取り組みが不十分だ」などと言うつもりはないが、幼稚園や小学校、中学校の義務教育機関で取り組んでいる教育が、本当に教育的なのかどうか、省みる眼も必要ではないかと思う。

冒頭の、養護教員や園長は、感覚的にその危惧を持っているのだと思う。

幼稚園や中学校は3年間で終わりなのではなく、小学校は6年間で終わりなのではない。

ある時期の教育機関で表面化している問題を解決するためには、その当事者機関の頑張りだけでは不十分であることも多い。教育はバトンパスだだと思うからだ。

僕は教育畑の出身でもないし、大学の非常勤講師に過ぎないが、だからこそ思えることもある。「潰れかけのお店を救ったのは、常連の何気ない一言だった」。そんな例は数限りなくあるだろう。ただ一方で、果たして常連になる価値がある店なのかどうか？ を思案している人も多いと思う。



## 「ハロー！」で始まる大使館でのインターンシップ

大学で学生と取り組んでいる「キャリア教育」プログラムの中核には、インターンシップが据えられている。ここで最近おもしろいと感じているのが、大使館でのインターンシップだ。理由はいくつもある。

ひとつ目は今後、望む・望まないに限らず、多くがグローバル人材としてビジネスをしていかなければならないであろう現役学生の、視野を広げることだ。当然国によって就職やインターンシップの価値観も違う。その出会いも貴重なものとなる。

最近の大学生は「海外旅行に行かない」と言われるが、就職に有利だと信じインターンシップにはよく行く。そこで、それを利用して海外旅行させているようなものだ。そしてこれが効果がある。



例えば懇意にしている大使館は、残業がない。また、毎日定時になると神に祈りを捧げるため業務が中断する（インターン生が参加を強制させられることはない）。コミュニケーションは当然英語、また、他国からの長期でインターンとして日本に来て業務に従事している学生もいる。このような環境で1ヵ月でも暮らせば、価値観に多少なりとも変化が起こらない方がおかしい。それは、自らを客観視する際の、非常に重要な糧になると思う。

ふたつ目は比較的協力先の開拓が容易であることだ。インターンシップに学生を送り込む大学として一番骨を折るのが「協力企業の開拓」である。自社の営業活動にメリットを見出しにくく、また、私がインターンシップ先の企業に「会議への参加」や「キャリアインタビューへの協力」など様々なことをお願いするので、受け入れ先からすると、「面倒」なことも少なくない。

ところが大使館は受け入れてもらいやすい。その理由はこうだ。

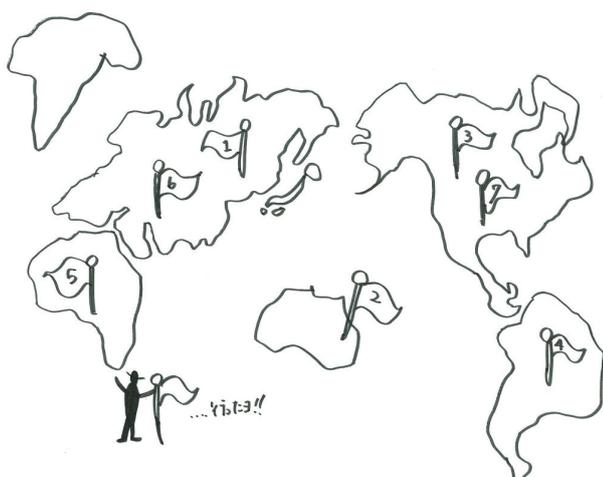
大使館は「日本にいる母国民の生活を助け守る」ことが大きな役割である。一方で「日本人にその国のことを好きになってもらう」ことも大きな果たすべき役割と認識している。そこに、伝播力の高い大学生が、わざわざ自腹で一ヵ月研修に来ると言うのだ。これは使いようで、かなりの宣伝媒体になる。

つまり、インターン生に広報の仕事をさせ、その国の魅力をどう日本人に伝えていくのかを課題にすればいいのだ。やがてその国の色々を知った

学生は、まず学生自身がその国のファンになる。実際に大使館でのインターンを終えた学生は「卒業旅行にその国をたずねてみたい」と言う子が多い。大使館からしても、このように地道にファンを開拓していくことは、長期的な財産づくりといえる。つまり、かなり明確な win-win 関係が築けると思うのだ。

実際、インターンシップ期間中に訪問すると、双方の満足度は非常に高い。一般企業の場合は「戦力になっているかどうか?」「現社員に刺激を与えているかどうか?」「面倒事を引き起こしていないか?」がジャッジのファクターになるのに対し、大使館は「楽しんでくれているかどうか」でジャッジしてくれる。実際のところ学生にかかるプレッシャーも軽いのだ（学生自身は派遣先がどこであり日々必死であるが）。

上記のような理由から、僕はこの大使館インターンが、すべての大学のスタンダードになればいいのにと考えている。「海外旅行は、長期の大使館インターンも含めると 7 か国行きました」。そんな受け答えも、なかなか今風でいいのではないかと考えている。



文/だん・あそび

アソブロック株式会社、有限会社 ea 代表、ホン  
ブロック発行人、立命館アジア太平洋大学非常勤  
講師

絵/たかおか・みなみ

いつかの夢はイラストレーター。現在は編集者。

アソブロック株式会社所属